

## 第4章 対訳・音注配置の比較

### 1. はじめに

『捷解新語』は朝鮮における司訳院の日本語学習書で、日本語本文(平仮名)の他に朝鮮語による対訳と音注が施されており、早くから日本語や朝鮮語の言語資料として多岐にわたって取り上げられている。また、原刊本(1676)から改修本(1748)、重刊本(1781)へと改訂が行われるなか、対訳の位置や配置という形式的な面にまで改修が行われていたことが指摘されている<sup>\*</sup>。具体的に述べると、原刊本では日本語の一文(句)ごとに、割り注の形で、対応する朝鮮語対訳を付すのに対し、改修本、重刊本では日本語の左側に語や文節ごとに対応する朝鮮語対訳を配置させている。一方、原刊本から重刊本にかけて改訂が行われても、音注の配置には大きな変化が見られない。即ち、朝鮮語による対訳の配置とはちがって、ハングル音注の場合は基本的に日本語本文の一文字に対してハングル音注一文字という一対一の相対の形式を取っている。辻(1997b)では、「相対」(真横への配置を「相対」と名付け、「対応」と区別する)という用語が用いられており、日本語本文に対する対訳が、多少、上下にずれた場合も含める。しかし、本論文では日本語本文に対するハングル音注・対訳が真横にあるか、ずらしてあるかをも問題とするため、日本語本文に対する音注・対訳が一対一の相対の場合は「真横表記」とし、二対一、三対一の相対(日本語本文の仮名と仮名とのあいだに音注・対訳が施されている)の場合は「ずらし表記」とする。

しかし、音注の配置はすべて統一されているとは限らない。例えば、促音、撥音、拗音、舌内入声音(閉音節)などの場合には日本語本文に対してハングル音注が一対一の相対関係ではなく、一般的に平仮名と平仮名のあいだにずらして表記する傾向が見られる。

## ①「促音、撥音、拗音」の対訳・音注の配置例

音 注	인 세 쯔	다 이 관	슈 몬
日本語本文	<u>い</u> <u>つ</u> 세 つ	た い <u>く</u> <u>わ</u> <u>ん</u>	<u>し</u> <u>ゆ</u> <u>も</u> <u>ん</u>
対 訳	一 切	代 官	守 門
	(改三23ウ)	(改一1オ)	(改一2オ)

(下線は筆者注、以下同様)

[1]

[2]

[3]

上記のように、朝鮮語の対訳と音注が日本語本文に真横表記されている場合(①の日本語本文「せつ」「たい」に対する対訳、音注)とずらし表記されている場合(①の下線部の対訳、音注)がある。また、巻十に見られる舌内入声音(閉音節)の場合にも、対訳と音注の配置が日本語本文に対してずらし表記の例が見られる。

本論文では、『捷解新語』改修本における朝鮮語による対訳と音注の配置の用い方について巻別に調査・考察を行うことにする。改修本を対象としている理由は、前述のように、原刊本の体裁は日本語の一文(句)ごとに割り注で対応する朝鮮語対訳を付すのに対し、改修本では日本語の左側に語や文節ごとに対応する朝鮮語対訳を配置させていることから、まず、対訳の配置と音注の配置が比較できる改修本を中心に考察を行う。また、重刊本の対訳、音注の配置はほとんど改修本的方式を踏襲しているが、これらの例については必要に応じて取りあげることとする。

以下、日本語本文に対する朝鮮語対訳、ハングル音注の配置における真横表記の例とずらし表記の例を検討することによって、『捷解新語』における朝鮮語対訳及び音注の配置は、日本語と朝鮮語に共通する言語構造を利用し、朝鮮語母語話者に

日本語を正しく学習させようとする日本語学習書としての試みによるものであることを明らかにする。

## 2. 先行研究と問題提起

濱田(1970, pp. 44-45)では、『捷解新語』における朝鮮語と日本語との間の対訳について、「同じ内容を表すべき「語」が、左右のページのほぼ同じ場所に現れる」ことが可能であるとしている。特に、重刊改修本(本論文の重刊本)では「朝鮮語は、日本語のすぐ左側に、それぞれの「語」に対するひきあてがなされて、真の意味での「対訳」と云える形を採っている」としている。その他、安田(1966, p. 477)でも、第二次改修本(本論文の重刊本)における朝鮮語と日本語との対訳について「文法的構造の酷似から来る構文の共通性から、まさに対訳、translation side by side with the originalに倣する体裁を採った」との指摘があるが、どちらも音注の配置については述べられていない。また、辻(1997b)では、『捷解新語』改修本における日本語本文と朝鮮語対訳との配置関係を中心に調べ、以下のようにまとめている。「日本語の体言その他に助詞類(格助詞・副助詞・係助詞など)が付属している場合、一般的に、日本語の助詞に対応する朝鮮語の助詞は相対させている」とする。また、この中には相対しない例も見られるとし、「この場合には、朝鮮語の助詞は、上接語と連続して1文節として表記されている」\*2と述べている。その具体的内容を箇条書きすると、以下のようなものである。(辻(1997b, p. 153)以下参照)

- (1) 体言：日本語の体言には、それに対応する朝鮮語を相対させることを原則としている。([4]「くんくわん」(軍官)、[5]「なかもとふね」(中帰船)の例参照；筆者注。以下、[6]～[16]の例も同様である)
- (2) 格助詞・副助詞・係助詞類：日本語の体言その他に助詞類(格助詞・副助詞・係助詞など)が付属している場合、一般的に日本語の助詞に対応する朝鮮語の助詞は相対させている。([6]「はかり」、[7]「まで」、[8]「こそ」の例参照)

- (3)用言複合体(用言の語基に種々の接辞(助動詞)や助詞が付く例：日本語の用言複合体の文節には、対応する朝鮮語の用言複合体の文節を一括して相対させていることが多い。([9]「きのとくに」、[10]「おろかにませうか」の例参照)
- (4)接続助詞：日本語の接続助詞に対応する朝鮮語の要素は、いわゆる接続語尾であるが、この接続助詞と接続語尾を相対させていない例が多い。(以下は、相対させている例：[11]「いたませうけれとも」、[12]「御さらは」の例参照)
- (5)複合体内部での相対：日本語の用言複合体を構成する助動詞についても、対応する朝鮮語の形式を時に相対させていることがある。  
([13]「そろわすして」(否定)、[14]「いとりました」の例参照)
- (6)補助動詞：補助動詞はその接続の種類によって、相対の率が異なるが、平均して6割程度の相対率を示している。([15]「～なさる」、[16]「～御さる」の例参照)

[4]一33オ

군  
관  
관

[5]一11オ

가  
모  
도  
리  
부  
너

[6]四28オ

관  
계  
바  
파  
리

[7]一2オ

슈  
문  
아  
매

[8]五40オ～ウ

호  
메  
피  
고  
쓰

[9]—4ウ

민 기  
망 노  
의 보  
고 쿠  
히 나

[10]三20オ

얼 오  
현 로  
까 까  
이 니  
하 시  
리 마  
일 쇼  
세 우  
가 까

[11]—23オ～ウ

하 이  
을 다  
다 시  
시 아  
쇼 우  
세 우  
거 게  
레 레  
도 도  
모 모

[12]—2オ

계 연  
시 사  
사 라  
바 바

[13]—19ウ

몬 소  
지 로  
로 와  
와 스  
스 시  
시 때

[14]三24オ

안 연  
장 도  
리 리  
마 마  
시 시  
다 다

[15]二1ウ

하 오  
하 도  
하 가  
하 이  
하 나  
하 사  
하 세  
하 마  
하 시  
하 때

[16]二4ウ

하 맥  
하 이  
하 나  
하 연  
하 사  
하 리  
하 마  
하 쇼  
하 루

(以上の [4] ～ [16] は改修本の例)

さらに、「重刊本では、改修本の方式を踏襲するが、相対をより厳密なものとしている」とし、改修本ではほとんど相対させていなかった日本語の用言複合体の接続助詞、終止語尾もほぼ規則的に相対させているとしている。また、日本語本文に対する朝鮮語対訳の配置を検討することによって、両言語の構造に対する文法意識、文法分析に関わる問題を探ることができるとしている。

一方、日本語本文に対する音注の配置については、これまでほとんど言及されていない。安田(1980)においても、重刊本の仮名本文とハングル音注に朱の円が施さ

れているという指摘にとどまっている。

勿論刊行後のことであろうが、円(10.5耗)が、朱で、仮名本文と音注謄文に施こされている。仮名本文のは、「や」・「ゆ」・「よ」・「わ」を添えた拗音節と撥音節との表記、換言すれば、その殆んどは、先に述べた連字が用いられている個所および、促音「つ」・「く」と直前の音節との中間に、記されている。

(安田(1980, p. 103))

このように、これまで日本語本文の左側に施されている朝鮮語対訳の配置については、具体的に取りあげられてきているのに対して、日本語本文の右側に施されているハングル音注の配置についてはほとんど論じられていないのが現状である。そこで、以下では朝鮮語対訳とハングル音注の配置について探ってみることにする\*3。

### 3. 対訳・音注の配置の原則

朝鮮語対訳は日本語本文の左側(本論文では下段、以下同様)に語や文節ごとにハングルと漢字をもって施されているのに対して、音注は日本語本文の右側(本論文では上段、以下同様)に基本的に一対一の相対(真横音注)でハングル表記が用いられている。

#### ②対訳・音注の配置例

나	님	가	시	고	고	예	고	이	소	나	다	다	이	관
<u>な</u>	<u>に</u>	<u>か</u>	<u>し</u>	<u>こ</u>	<u>こ</u>	<u>ゑ</u>	<u>こ</u>	<u>い</u>	<u>そ</u>	<u>な</u>	<u>た</u>	<u>た</u>	<u>い</u>	<u>くわん</u>
아모가히		이러				오라	네			代			官	

쥬 우 예 인 데 와 레 와 레 노 구 쇼 우 까 라  
ち う ゑ い つ て わ れ わ れ の く し や う か ら  
 申 え が 内 전갈 로

(改一1オ)\*4

[図]改一1オ

わ れ たいくわん あに  
 れ たいくわん かし  
 れ たいくわん し  
 の たいくわん こ  
 の たいくわん こ  
 し やう えい  
 り う えい  
 か がつ い  
 ら たいくわん だ

上記②の例のように、朝鮮語による対訳の場合はほとんど日本語本文の語頭に合わせており(稀に、「오라」のように日本語本文の語頭に合わせていない例もある)、必ずしも日本語本文に対して均等に配置されていないのに対して、音注の場合は基本的に日本語本文に対して均等に配置されている。その理由は、対訳と音注の目的の違いによるものであろう。つまり、対訳は日本語本文の意味を把握することを目的としており、意味的に同じであってもそれぞれの日本語・朝鮮語の単語の構造や長さが異なるため当然厳密な一字毎の相対は無理なのに対して、

音注は日本語本文の仮名と正確に対応することを目的としているため、日本語本文に対する音注が均等に配置されているのであろう。但し、必ずしも常に音注が日本語本文に対して均等配置になっているのではなく、上で述べたように、促音、撥音、拗音、舌内入声音(閉音節)などの場合は日本語本文の上下にずらして配置されている。それは、実際の発音において二文字、三文字の日本語本文とハングル文字が対応するためである。即ち、②の「たいくわん」は実際の発音において tai-ku-wa-un\*4ではなくて ta-i-koan であることを、「いつて」は i-ccu-tyai ではなくて it-tyai であることを、「くしやう」は ku-zi-ya-u ではなくて ku-zyo-uであることを示すため、ハングル音注が日本語本文の仮名と仮名との間に施されているとが考えられる。

ここで、対訳配置の原則と音注配置の原則を箇条書きの形で示すと次のようになる。

＊対訳配置の原則(本章2節、辻(1997b, p.153)一部再掲)

- 1) 日本語と朝鮮語の言語構造の共通性(体言の自立性、音節単位、語順)から二字漢語や合成語の場合、その構成要素に対応する漢字や朝鮮語に相對させている。
- 2) 日本語の体言その他に助詞類(格助詞・副助詞・係助詞など)が付属している場合、一般的に、日本語の助詞に対応する朝鮮語の助詞は相對させている。
- 3) その他、相對しない例の場合には、朝鮮語の助詞は、上接語と連続して1文節として表記されている。

＊音注配置の原則

- 1) 日本語の仮名が音節単位の表音節文字であり、ハングルも音節単位のまとまりを持つ文字であるという共通性を利用し、ハングルをもとに日本語の発音をできるだけ正確に習得することを目指して、一対一の均等配置の原則で、真横表記されるように配置されている。(直音、長音の例)
- 2) しかし、日本語の仮名単位とハンゲルの単位が対応できない場合があって、その場合は、一対一の真横表記ではなく、ずらして対応させることで、日本語の複数の仮名がハンゲルの一単位に対応していることを示し、実際の発音の習得に誤りがないように工夫されている。  
(撥音、促音、舌内入声音(t入声)、拗音の例)

4. 対訳・音注の配置——漢語が漢字対訳される場合

前述のように、音注の場合は基本的に日本語本文に対して均等に配置されているのに対して、対訳の場合は必ずしも日本語本文に対して均等に配置されていないのが現状である。但し、対訳の配置において漢字をもって対訳する場合は、日本語本文に対して対訳の漢字一文字一文字を配置させる方法が用いられている。辻(1997b)では、「二字漢語や合成語の場合は、その構成要素の対応する漢字や朝鮮語を相對させている」とし、「[くんくわん]:[軍官]」のように、漢字をもって対訳している場合、日本語に対応する部分に漢字一字ずつ相對させる」とする。



				[17]
音	注	군	관	
日本語本文		く	ん く わ ん	
対	訳	軍	官	
			(改一33オ)	

そこで、対訳と音注の配置関係を的確に調べるため、日本語本文に用いられる漢語が漢字をもって対訳される場合に限って対訳・音注それぞれの配置のあり方に関する考察を行うことにする。但し、日本語本文に用いられる日本語の固有語が漢字や漢語をもって対訳される場合は、日本語本文に対して対訳の配置が規則的でなく大まかな対応であることから対象外とする。その理由として、日本語の固有語でも「ふるまい」の例((例1)参照)の場合は対訳に漢字表記「振舞」が用いられており、改修本のすべての例が二字漢語を漢字対訳する場合と同様に均等配置されているが、これらの例を除く日本語の固有語が漢字や漢語をもって対訳されるほとんどの改修本の例は「かたしけなし」(忝)の例((例2)参照)のように不規則で大まかな配置になっているからである。

				[18]
(例1)「ふるまい」(振舞)の例(11例)				
音	注	후루마이		
日本語本文		ふ る ま い		
対	訳	振	舞	

：改六34ウ(例[18]), 八32ウ, 34ウ, 36オ, 九1オ, 4オ, 9ウ, 十下16オ, 17ウ, 19オ, 20ウ

(例2)「かたしけなし」(忝)の例			
音	注	가 다 △] 께 노 우	
日本語本文		か た し け な う	
対	訳	감 격 (하) (感激(하)) : 筆者注).....①	
		感激하	.....②
		感 激 하	.....③
		辱	.....④

## ①日本語本文の語頭から朝鮮語対訳が一对一配置される例(7例)

: 改一34オ(例[19]), 九25オ / 五26オ(例[20]), 27ウ /

三10ウ(例[21]), 八30オ, 九3オ, 25オ

## ②日本語本文の語頭から朝鮮語対訳が詰めて配置される例(4例)

: 改二9オ, 三23ウ(例[22]), 28オ, 九22ウ

## ③日本語本文の語頭から朝鮮語対訳が二対一配置される例(3例: 巻七のみ)

: 改七8オ, 21ウ(例[23]), 24ウ

## ④日本語本文の一文字目に朝鮮語対訳「辱」が配置される例(8例: 巻十のみ)

: 改十上3オ(例[24]), 13オ, 15ウ, 17オ, 十下16ウ, 18オ, 19ウ, 20ウ

[19]一34オ    [20]五26オ    [21]三10ウ    [22]三23ウ    [23]七21ウ    [24]十上3オ

改 一 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四	改 一 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四	改 一 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四	改 一 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四	改 一 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四	改 一 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四
---	---	---	---	---	---

一方、辻(1997b)の指摘は、漢字をもって対訳する場合、日本語本文に漢字を一字ずつ相対させているというものであり、それ以上の踏みこんだ考察がない。本論文では、日本語本文に対して対訳・音注の配置が真横に配置されるか、上下にずらして配置されるかを調べ、日本語本文に対する対訳・音注の配置が真横に施されている場合を「真横対訳」「真横音注」、対訳・音注の配置がずらして施されている場合を「ずらし対訳」「ずらし音注」と呼び、日本語本文に対する対訳・音注の配置関係を緻密に検討してみる。これは、『捷解新語』が日本語と朝鮮語の共通する言語構造を利用し、日本語本文に対する対訳・音注の配置の細かいところまで手を加えることによって、少しでも朝鮮語母語話者の日本語学習に役立たせようとする試みがあったことを検証するためである。なお、音注配置の個別的な問題

(撥音、促音及び舌内入声音、拗音等)については、第5章以下で詳細に論ずることにする。

#### 4.1. 「真横対訳」「真横音注」の場合

③쇼 우 가 이

せ う か い

捷 解 (改一1オ)

[25]

せ

う

か

い

<類例>(以下、<類例>はすべて改修本の例である。以下同様)

「巻一」たいいつ(第一 1オ)、ろし(路次 1ウ)、とうたう(同道 3オ)、

そさ(送使 6ウ, 7オ, 43オ)、ふてうはう(不調法 8ウ)、ふし(無事 15ウ)、

とかい(渡海 17オ, 32ウ)、あくふう(悪風 19オ)、すいふ(水夫 19オ)、

とうらい(東萊 20ウ, 30オ, 32オ, 37オ, 38ウ, 39ウ, 49オ, 50オ)、

ほうはう(方方 20ウ)、へち(別 23ウ)、せいめい(姓名 24ウ)、

つう(通 28オ, 29オ)、ようす(様子 30ウ)、さくしつ(昨日 32ウ)、

つうし(通事 35オ)、いちや(一夜 36ウ)、さいもく(材木 37オ)、

されい(茶禮 39オ, 40ウ, 44ウ)

(以上、巻一の例のみ。巻二以下の類例は省略)

以上、改修本「巻一」の開音節や長音の漢語の例がほとんど「真横対訳」「真横音注」であり、対訳・音注の配置がともに日本語本文の真横に施されている。即ち、③「せうかい(捷解)」のように、日本語本文(平仮名)の右側に音注が一字ずつ相対し、また漢字一字に当たるところの一文目左側の真横に対訳が配置される。これは、「巻二」から「巻十」までの開音節や長音の例についても同様のことが言える。

## 4.2. 「ずらし対訳」「真横音注」の場合

④ 소 사

そ さ

送使 (改一10オ(例[26]), 30ウ)

[26]

&lt;類例&gt;

「巻一」きとく(奇特 一10オ)「巻二」ふし (無事 二2オ)「巻四」たうり(道理 四4オ)「巻六」せいしん(聖信 六3ウ)「巻八」ふきやう(奉行 八1オ)

(下線部は、代表例と同じ配置であることを示す。以下同様)

⑤ 고 우 모 구

こ う も く

公 本

(改四9オ(例[27]), 13ウ, 14オ, 15オ, 15ウ)

[27]

&lt;類例&gt;

「巻四」いつそう(一隻(マ) 四10う(2例))、さんそう(三隻(マ) 四11オ, 11ウ)

そうもつ(雑物 四34ウ)

4.1で見たように、開音節や長音は「真横対訳」「真横音注」の配置が一般的であるが、例外的に④⑤の「ずらし対訳」「真横音注」の配置の例も見られる。

「ずらし対訳」「真横音注」の例のうち、④は日本語本文に対して音注が真横に配置されているが、対訳は日本語本文の一文字目のところから詰めた形となっており、日本語本文に対して対訳の漢字の配置がずれている例である。これらの例を全

体の用例数と比べてみると、「送使」8例のうち2例、「奇特」3例のうち1例、「無事」23例のうち1例、「道理」9例のうち1例、「聖信」7例のうち1例、「奉行」13例のうち1例が「ずらし対訳」「真横音注」の配置になっている\*<sup>6</sup>。

⑤は「公木」の「木」のように、日本語本文に対してハングル音注は真横に配置されているが、朝鮮語対訳は日本語本文の仮名と仮名の中間の部分に配置されている例である。これらの例を全体の用例数と比べてみると、「公木」26例のうち5例、「一隻(艘)」6例のうち2例、「三隻」2例のうち2例、「雜物」7例のうち1例(残りの6例は「さうもつ」)が「ずらし対訳」「真横音注」となっており、全体の用例数からみて「ずらし対訳」「真横音注」の数が少ないことが分かる。但し、ここで注意しなければならないことは、⑤と同じ漢語の例が他の巻にも見られるが、「ずらし対訳」「真横音注」の配置になっている例は巻四にしか見られないことである。開音節や長音が「真横対訳」「真横音注」の配置になっている例が全巻にかけて見られるのに対して、⑤のような例が巻四にのみ集中して見られるのは、編集時の誤りあるいは巻四が別筆である可能性が考えられる。④⑤のような例は全て重刊本において「真横対訳」「真横音注」の配置へと改められており、開音節や長音などにおける対訳・音注は基本的に「真横対訳」「真横音注」の配置となっている。

#### 4.3. 「ずらし対訳」「ずらし音注」の場合

⑥ 令 門

[28]

し ゆ も ん

守 門 (改一2オ)

<類例>

「巻一」たいくわん(代宣 1オ, 3オ, 9ウ, 13オ)、はんし(萬事 4ウ, 7オ)、

あんしん(安心 6ウ)、こんにち(今日 8オ, 16ウ, 18オ)、ひん(便 11オ)、

たいめん(對面 10オ)、にとくそうし(二特送使 11オ, 14オ, 14ウ)、

ふさん(釜山 12ウ, 20ウ, 24ウ, 30オ)、ゆたん(油斷 13オ)、

しよかん(書簡 13オ, 23オ, 24オ, 25オ, 25ウ)、あんない(案内 13ウ)、

たうねんてう(當年条 14ウ)、たいせん(大船 19オ)、  
 みやうにち(明日 18ウ, 21オ, 23ウ, 40ウ, 42ウ, 43ウ, 49ウ)、  
 しゃうくわん(正宣 21ウ, 34オ, 34ウ, 41オ, 43オ, 43ウ, 44オ, 44ウ, 46オ,  
 46ウ)、しゃうたい(正體 22ウ)、とうせんちう(都船主 22オ)、  
 ふうしん(封進 22オ, 22ウ)、ちうしん(註進 24ウ, 30オ)、  
 御しゆ(御酒 26ウ)、しゃうこ(上戸 27オ)、しんしやく(斟酌 27オ)、  
 みやうてう(明朝 30オ)、ひやう(病 39ウ, 43オ, 46ウ, 47ウ)、  
 にうくわん(入館 31オ)、くんくわん(軍官 33オ, 33ウ)、ねん(念 31ウ)、  
 かんにん(堪忍 36ウ)、ひやうしん(病身 41オ)、しよくし(食事 41ウ)、  
 さんし(暫時 44ウ)、さくはん(昨晚 46オ)、きしよく(気色 47オ)、  
 きやくしん(客人 48ウ)、ていしゆ(亭主 48ウ)、  
 やうしやう(養性 50ウ)、こんや(今夜 50ウ)  
 (以上、巻一の例のみ。巻二以下の類例は省略)

開音節や長音は、対訳・音注の配置が基本的に「真横対訳」「真横音注」であるのに対して、⑥のような例は対訳・音注ともに日本語本文の仮名と仮名との中間部分にずらして配置させた「ずらし対訳」「ずらし音注」の例で、このような配置をとる漢語には促音、撥音、拗音、舌内入声音(巻十の閉音節)などが含まれている。これらの語は、上記の「巻一」の例と同様に「巻二」から「巻十上」までの例についても、「ずらし対訳」「ずらし音注」の配置方法が用いられている。

これは重刊本の巻末にある「伊呂波吐字」「伊呂波合字」の撥音、拗音などが他の仮名の下に連ねてあることや仮名本文の撥音節、拗音節の連字が用いられている個所及び、促音「つ」「く」と直前の音節との中間に、朱円が記されていることとも関連しているものと思われる\*7。

一方、巻十(特に、十中、十下)の例は、巻一から巻九までの配置の方法とは異なっている。巻一から巻九までの促音、撥音、拗音の例は対訳や音注が日本語本文の仮名と仮名との間にずらして表記される「ずらし対訳」「ずらし音注」が一般的であるが、巻十の例においては「真横対訳」「ずらし音注」の配置方法が一般に用い

られている(4.4参照)。

#### 4.4. 「真横対訳」「ずらし音注」の場合

4.3で見てきたように、促音、撥音、拗音などの例は一般的に「ずらし対訳」「ずらし音注」の配置の方法が用いられるのに対して、⑦のように「真横対訳」「ずらし音注」が用いられる場合がある。

⑦ 신 고

し ん こ

新 語 (改一1オ)

[29]

新 } 신  
語 } 고

<類例>

「巻一」すいほくせん(水木船16ウ)

「巻五」しんす(信使 33ウ)、さんし(三使 35オ)

「巻六」しやうけ(上下 5オ)、ちや(茶 9オ)、いんきん(懃懃 15ウ)、  
しゆつせん(出船 15ウ, 18オ, 19オ, 20オ, 23オ)、  
はんし(萬事 21オ, 34ウ)、せつたい(接待 21ウ, 23ウ, 24ウ)、  
しんし(信使 25ウ)

「巻七」しんこ(新語 1オ)、しつち(七 1オ)

「巻八」たいしゆ(太守 11オ)、さいせん(在前 11ウ)、  
さんし(三使 18ウ)、しゆつせん(出船 31オ)

「巻九」はんし(萬事 20オ)、しよりやう(所領 31オ)、ちくせん(筑前 38ウ)

「巻十上」しんこ(新語 1オ)、けいしやう(啓上 1オ)、さくはん(昨晩 1オ, 5ウ)、  
ゑんいん(延引 2オ)、さんしやう(参上 2ウ)、こんさつ(悃札 13オ)、  
いつひつ(一筆 14ウ)、はいけん(拜見 16ウ)

「巻十中」しんこ(新語 1オ)、せんこく(先刻 1オ)、しよちやう(書状 1オ)、  
あいたつし(相達し 1オ)、ふうしん(封進 1ウ, 3ウ, 4ウ, 10オ, 11オ)、  
ゑんせき(宴席 1ウ, 3ウ, 7オ)、こさんにち(五三日 1ウ)、

ふさん(釜山 2オ, 4オ, 5オ, 10オ)、にさんにち(二三日 2ウ)、  
 いこん(遺恨 3オ)、こんてう(今朝 3オ, 9ウ)、りやうと(兩度 3ウ)、  
 はいけん(拝見 3ウ)、りやうしよ(兩所 4オ)、へんし(返事 4ウ)、  
 きふん(気分 5オ)、りやうにち(兩日 5ウ)、やうしやう(養性 5ウ)、  
 御らん(御覽 6ウ)、せつせつ(切切 7オ)、ちやうたい(頂戴 7オ)、  
 すいふん(随分 8ウ)、てんき(天気 9オ, 11ウ, 13ウ)、  
 せいてん(晴天 9ウ)、たいくわんしゆ(大宣衆 10ウ)、  
 ちうしん(註進 12ウ)、しよちう(晝中 12ウ)、しめん(紙面 13オ)、  
 そん(存 14オ, 17ウ, 21ウ)、こんにち(今日 14オ)、きめん(貴面 15ウ)、  
 すいさつし(推察し 14ウ)、そのせつつ(其節 15オ)、  
 あんない(案内 15ウ)、にほん(日本 15ウ, 17オ)、きかん(貴翰 17オ)、  
 はいしゆ(拝受 17オ)、ねん(念 17ウ)、たん(段 17ウ)、ひん(便 18ウ)、  
 こんみやうにち(今明日 19オ)、たふん(多分 19ウ)、はん(晩 20オ)、  
 ちやくかん(着岸 20ウ)、せんいち(專一 21オ)、  
 くわんちやく(館着 21ウ)、にうくわん(入館 22オ, 23ウ, 26ウ)、  
 すいきよ(吹嘘 22ウ)、こんまん(今晚 24オ)、きゑつ(喜悦 24オ)、  
 たいみやうしゆ(大名衆 25ウ)、みやうにち(明日 26オ)  
 「巻十下」しんこ(新語 1オ)、いつしよ(一晝 1オ)、けいたつ(啓達 1オ)、  
 こんねんふん(今年分 1ウ)、きよねん(去年 1ウ)、みしゆ(未収 1ウ)、  
 みやうにち(明日 2オ, 3ウ, 16オ, 17オ, 18ウ)、  
 あきうとしゆ(商人衆 2ウ, 7オ)、たん(段 3オ)、いつきん(一斤 3ウ)、  
 そん(存 3オ, 5オ, 9ウ, 15オ, 18ウ, 19オ)、ふしん(不審 5オ)、  
 さんはんきん(三萬斤 6ウ)、しよたいくわん(諸大宣 7オ, 15ウ)、  
 たんかう(談合 7ウ)、みやうてう(明朝 8ウ)、さうたん(相談 9オ)、  
 いつさくしつ(一昨日 9ウ)、ほんまう(本望 9ウ)、  
 たいいつせん(第一船 10オ)、すいもくせん(水木船 10オ)、  
 いつそう(一艘 10オ, 10ウ)、にかうせん(二號船 10ウ)、  
 しつそく(十束 11オ)、ひやくひやう(百俵 11オ)、



こんみやうにち(今明日 11オ)、ゆたん(油断 12オ)、  
 めんはい(面拝 12ウ)、そんしよ(尊書 12ウ)、  
 はいけん(拝見 12ウ, 17オ)、かくくわん(各宣 13ウ)、  
 いちゑん(一圓 13ウ)、いつそく(一束 14オ)、くわんちう(館中 15ウ)、  
 とせん(徒然 15ウ, 17ウ)、せつしや(拙者 16オ)、しふん(時分 16ウ)、  
 あんない(案内 17オ)、きかん(貴翰 17オ)、いちたん(一段 17ウ)、  
 さんくわい(参會 18ウ)、やせん(夜前 19オ, 21ウ)、  
 いつひつ(一筆 20オ)、しゆしゆ(種種 20オ)、れいちやう(禮状 21オ)、  
 へんし(返事 22オ)、ほんい(本意 22ウ)、めんしやう(面上 22ウ)、  
 まんまん(萬萬 22ウ)

促音、撥音、拗音などは「ずらし対訳」「ずらし音注」の配置が一般的であるが、  
 以上のように、「真横対訳」「ずらし音注」の配置の例も多々見られる<sup>\*)</sup>。そのうち、  
 本節で取りあげる「真横対訳」「ずらし音注」の配置は、改修本の中でも巻一～巻  
 九と巻十とで異質である。

まず、改修本巻一から巻九までの例のうち、主な「真横対訳」「ずらし音注」の  
 例を全体の用例数と比べてみると、「信使」30例のうち2例、「三使」10例のうち2例、  
 「慇懃」6例のうち1例、「出船」14例のうち5例、「萬事」8例のうち3例、「接待」6  
 例のうち3例などで、促音、撥音、拗音の多くの例は「ずらし対訳」「ずらし音注」  
 の配置であることが分かる。ただ、巻六には「出船」14例のうち5例と、「接待」6  
 例のうち3例のすべての例が「真横対訳」「ずらし音注」として配置されており、巻  
 によって対訳の配置に偏りがあったことがうかがえる。

また、改修本巻十の例のうち、「巻十上」の場合は「真横対訳」「ずらし音注」の  
 例が散発的に見られるのに対して、「巻十中」においては「りやうにち(両日 15オ)」  
 「にうくわん(入館 15オ)」の2例の他は、すべての例が「真横対訳」「ずらし音注」  
 の配置になっている。さらに、「巻十下」になるとすべての例に例外なく「真横対  
 訳」「ずらし音注」という配置方法が用いられている。

対訳の配置において促音、撥音、拗音の多くの例に巻一～巻九では「ずらし対訳」、

巻十では「真横対訳」が用いられている。このように、巻一～巻九に対して巻十のみが対訳配置にズレが見られることから、巻十が別筆である可能性が考えられる。

その他、「真横対訳」「ずらし音注」の例外的な例を取りあげると、以下のようである。

＊ 日本語本文と読みが異なる例

「巻六」 しゃへつ(差別 改六27ウ)

「巻九」 りやうけん(愚見 改九19ウ)

＊ 促音としてとらえられた例

「巻十中」 そくさい(息災(sok·sa-i) 改十中24ウ)

「巻十下」 とくそう(特送(tok·so·u) 改十下10オ)

かくくわん(各官(kak·koan) 改十下13ウ)

＊ 紙面の都合により字詰めになっている例

「巻六」 いんきん(慇懃 改六7オ、例[30])

：同じ巻六に見られる例[31]は、「ずらし音注」とともに「ずらし対訳」の配置となっている。

「巻七」 ににん(二人 改七14オ、例[32])

重刊本へと改訂される過程において、改修本巻一～巻九の「真横対訳」「ずらし音注」の例は、ほとんどの例が「ずらし対訳」「ずらし音注」へと改められることになる。また、改修本巻十の「真横対訳」「ずらし音注」の例も重刊本において「ずらし対訳」「ずらし音注」へと書き改められることになるが、まだいくつか例外が見られる。そのほとんどの例は「しやう(上)」「ちやう(状)」「りやう(両)」「みやう(明)」のような拗音の例と、その他「けいたつ(啓達、重十上 12オ)」「すいふん(随分、重十中 7オ)」「あんない(案内、重十中 13ウ)」などの例である。

[30]改六7オ

今<sup>イ</sup>ニ<sup>ニ</sup>  
 日<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>  
 ち<sup>チ</sup>ち<sup>チ</sup>  
 云<sup>ウン</sup>わ<sup>ワ</sup>  
 御<sup>ミ</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
 慈<sup>ジ</sup>ソ<sup>ソ</sup>  
 勉<sup>ミ</sup>ミ<sup>ミ</sup>  
 勤<sup>キン</sup>ミ<sup>ミ</sup>  
 心<sup>シン</sup>の<sup>ノ</sup>

[31]改六10オ

色<sup>シキ</sup>イ<sup>イ</sup>  
 ろ<sup>ロ</sup>ろ<sup>ロ</sup>  
 色<sup>シキ</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
 外<sup>ガイ</sup>ろ<sup>ロ</sup>  
 世<sup>セ</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
 慈<sup>ジ</sup>ソ<sup>ソ</sup>  
 勉<sup>ミ</sup>ミ<sup>ミ</sup>  
 勤<sup>キン</sup>ミ<sup>ミ</sup>  
 心<sup>シン</sup>に<sup>ニ</sup>  
 心<sup>シン</sup>ハ<sup>ハ</sup>

[32]改七14オ

ニ<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>  
 人<sup>ニン</sup>に<sup>ニ</sup>  
 三<sup>サン</sup>ろ<sup>ロ</sup>  
 三<sup>サン</sup>シ<sup>シ</sup>  
 七<sup>シチ</sup>マ<sup>マ</sup>  
 七<sup>シチ</sup>マ<sup>マ</sup>  
 七<sup>シチ</sup>マ<sup>マ</sup>  
 七<sup>シチ</sup>マ<sup>マ</sup>  
 七<sup>シチ</sup>マ<sup>マ</sup>  
 七<sup>シチ</sup>マ<sup>マ</sup>

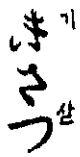
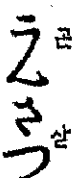
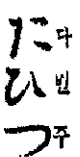
(傍線は筆者による。以下同様)

## 5. 舌内入声音の対訳・音注について

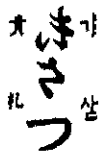
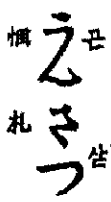
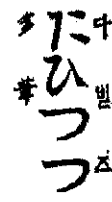
中古漢語の舌内入声音は、キリシタン資料のローマ字表記があらわすように中世末期まで<sup>t</sup>が保たれていたとされるが、朝鮮資料のハングル表記においては開音節化をあらわす表記が用いられている。そこで、本節では、『捷解新語』における舌内入声音の対訳・音注の配置を調べ、舌内入声音がどのように読まれていたかを見てみることにする。『捷解新語』における舌内入声音は、巻一～巻九ではすべての刊本が4.1でみた③の開音節のように「真横対訳」「真横音注」の配置になっている。それに対して、巻十(閉音節)では4.3でみた⑥の促音、撥音、拗音のように「ずらし対訳」「ずらし音注」の配置になっているのが一般的である。即ち、舌内入声音の場合でも開音節であるか閉音節であるかによって、対訳や音注の配置が異なっていたことが明らかである。但し、改修本における巻十の対訳の場合、促音、撥音、拗音に「真横対訳」「ずらし音注」の配置方法が用いられており、改修本巻十における対訳の配置については例外として考えなければならない(4.4参照)。

以下に、巻十の舌内入声音の例をいくつか取り上げる。

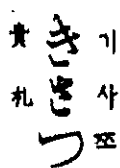

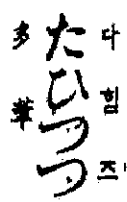
「原刊本卷十」	기 살	곤 살	다 빌 주
	き さ つ	こ ん さ つ	た ひ つ
	(貴札)*9	(惴札)	(多筆)

[33]十5ウ	[34]十7オ	[35]十10オ
		

「改修本卷十上」	기 살	곤 살	다 빌 즈
	き さ つ	こ ん さ つ	た ひ つ つ
	貴 札	惴 札	多 筆

[36]十上10オ	[37]十上13オ	[38]十19オ
		

「重刊本卷十上」	기 사 쯔	곤 살	다 힐 즈
	き さ つ	こ ん さ つ	た ひ つ つ
	貴 札	惴 札	多 筆

[39]十上8オ	[40]十上10ウ	[41]十上15オ
		

以上の例からも分かるように、舌内入声音「貴札」の音注の場合、原刊本と改修本では閉音節の形「sat」(sat)として「ずらし対訳」「ずらし音注」の配置になっているが、重刊本では開音節の形「사즈」(sa-ccw)として「真横対訳」「真横音注」の配置になっている。このように、舌内入声音の中でも閉音節であるか開音節であるかによって、対訳と音注の配置が異なっていたようである。言い換えれば、『捷解新語』における舌内入声音は対訳と音注の配置によって、主に巻一～巻九に見られる「즈」(ccw)は開音節として、巻十に見られる「-ㄷ」(t)は促音、撥音、拗音のように閉音として発音されていたことがうかがえる。

## 6. 本章のまとめ

以上、日本語本文に対する朝鮮語対訳、ハングル音注の配置における真横表記の例とずらし表記の例を検討することによって、『捷解新語』における対訳配置、及び音注配置の原則を以下のようにまとめることができた。

### \* 対訳配置の原則(辻(1997b, p. 153)一部再掲)

- 1) 日本語と朝鮮語の言語構造の共通性(体言の自立性、音節単位、語順)から二字漢語や合成語の場合、その構成要素に対応する漢字や朝鮮語に相対させている。
- 2) 日本語の体言その他に助詞類(格助詞・副助詞・係助詞など)が付属している場合、一般的に、日本語の助詞に対応する朝鮮語の助詞は相対させている。
- 3) その他、相対しない例の場合には、朝鮮語の助詞は、上接語と連続して1文節として表記されている。

### \* 音注配置の原則

- 1) 日本語の仮名が音節単位の表音節文字であり、ハングルも音節単位のまとまりを持つ文字であるという共通性を利用し、ハングルをもとに日本語の発音をできるだけ正確に習得することを目指して、一対一の均等配置の原則で、真横表記されるように配置されている。(直音、長音の例)

2)しかし、日本語の仮名単位とハングルの単位が対応できない場合があって、その場合は、一対一の真横表記ではなく、ずらして対応させることで、日本語の複数の仮名がハングルの一単位に対応していることを示し、実際の発音の習得に誤りがないように工夫されている。

(撥音、促音、舌内入声音(t入声)、拗音の例)

また、『捷解新語』改修本における漢語の対訳・音注の配置の実態について検討した結果、語によって対訳と音注の配置に違いが見られる場合(a, b)と、巻によって対訳と音注の配置に違いが見られる場合(c, d)があることが分かった。

- a. 開音節、長音の場合：「真横対訳」「真横音注」
- b. 促音、撥音、拗音、舌内入声音(閉音節)の場合：「ずらし対訳」「ずらし音注」
- c. 開音節、長音は全巻にかけて「真横対訳」「真横音注」の配置であるのに対して、⑤の「ずらし対訳」「真横音注」の配置例が巻四にのみ集中して見られる。
- d. 促音、撥音、拗音の多くの例は「ずらし対訳」「ずらし音注」の配置であるのに対して、「出船」14例のうち5例と「接待」6例のうち3例が巻六でのみ「真横対訳」「ずらし音注」として配置されている。また、巻十の例のうち、「巻十上」の場合は「真横対訳」「ずらし音注」の例が散発的に見られるのに対して、「巻十中」では2例を除いた全ての例が「真横対訳」「ずらし音注」として配置されている。また、「巻十下」では全ての例が例外なく「真横対訳」「ずらし音注」として配置されている。

一方、和語の音注配置についても、以上の漢語の例と同様に和語の促音、撥音、拗音などの例は日本語本文の仮名と仮名の間部分に規範的に「ずらし音注」が用いられており(《資料》参照)、その他の例は仮名の真横に音注される「真横音注」が一般的である。このように、漢語や和語における音注の配置には規範性、統一性が見られ、重刊本へと改訂されても対訳・音注の配置が厳密に施されているという

ことは、日本語と朝鮮語の共通する言語構造を利用し、朝鮮語母語話者の日本語学習者が日本語本文の仮名を読むときに間違いがないようにし、日本語の正しい発音を学習させようとする編集目的に沿うための努力の表われと考えられる。

以上、本論文では、対訳・音注の配置という形式的な面について主に取りあげてきた。今後『捷解新語』を日本語史や朝鮮語史の資料として取り扱う場合、以上のような形式的な面に留意しつつ考察を行う必要があるだろう。また、他の巻と対訳・音注の配置のちがいが見られる巻四、巻六、巻十の配置例は、編集時の誤りあるいは別筆の可能性が考えられるが、これらを含め、舌内入声音の表記・音価などについてもさらに検討しなければならない。なお、音注の配置原理の詳細については、次章でさらに詳しく考察を加える。

## 注

- \*1 辻星児(1997b, p. 153以下)参照。
- \*2 辻星児(1997b, pp. 156-157)参照。少数ではあるが、助詞類のうち相對しない例の現れやすい条件として、以下のような例を挙げている。
  - a)朝鮮語の助詞 ‘ㄹ’ が母音終わりの体言に付く場合や助詞 ‘의’ が体言末音節と融合した場合、b)対訳が動名詞語尾 ‘로’ + 助詞の場合(例えば ‘미’ )、c)朝鮮語が「用言+語尾」で対訳されている場合(例えば ‘때’ )。
- \*3 日本語本文に対するハングル音注の配置原理の詳細については、次の章で改めて述べることにする。
- \*4 用例の「改」の標示は、改修本の用例であることを示す。また、原刊本の用例の場合は「原」、重刊本の用例の場合は「重」として示す。以下同様である。
- \*5 ハングルのローマ字表記は、主に河野六郎(1994)を参考する。以下同様である。
- \*6 これらの例の中で「奇特」(改九20ウ)、「無事」(改一10オ)の例は、ハングルによる対訳も一例ずつ用いられており、他のハングルによる対訳と同じように日本語本文の一文字目のところから文字を詰めて配置する方法を取っている。
- \*7 安田章(1980, pp. 103-104)参照。「促・撥・拗音節以外に、仮名本文中で、朱

円は見られない点から推すと、仮名表記の上で、これらを、特に他と区別しようとしたのであろう」との指摘がある。

- \*8 撥音の場合においても、例外的に対訳・音注がともに日本語本文の真横に配置されている例が見られる。

「巻八」 しゆつせん(出船 改八14ウ(例[42]), 34オ)

「巻十上」まんまん(萬萬 改十上4ウ(例[43]), 18ウ)

さうはん(早飯 改十上9オ(例[44]))

[42]	[43]	[44]

- \*9 原刊本の( )内の対訳は、本来は日本語本文中に割り注になっているものである。

#### 参考文献

河野六郎(1994)「ハングルとその起源」『文字論』三省堂

辻 星児(1988)「戊辰版『改修捷解新語』の朝鮮語について－その表記・音韻を中心に－」『岡山大学文学部紀要』10、

『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部1997所収

辻 星児(1997a)「『捷解新語』に見られる文法意識－対訳朝鮮語の配置を通して－」『日本語と朝鮮語(下)』国立国語研究所

辻 星児(1997b)『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部

濱田 敦(1962)「外国資料」『国語国文』31-11

濱田 敦(1970)「朝鮮資料」『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店



安田 章(1960)「重刊改修捷解新語解題」『朝鮮資料と中世国語』

笠間書院1980所収(「捷解新語の改修重刊」)

安田 章(1966)「対訳」『国語国文』35-6

安田 章(1980)『朝鮮資料と中世国語』笠間書院

安田 章(1987)「捷解新語の改修本」『国語国文』56-3

《資料》和語における「促音、撥音、拗音」の音注配置

	改修本 卷一
促音	いつて(1オ(例[45])), 御 <u>さ</u> つて(9ウ(例[46]), 16オ)、 ま <u>っ</u> て(11ウ(例[47])), ま <u>い</u> つた(11ウ)、あ <u>か</u> つて(12オ)、 も <u>っ</u> て(13ウ, 33ウ, 49オ)、御 <u>さ</u> つた(16ウ, 17オ, 32ウ, 39ウ)、 あ <u>っ</u> ても(25ウ)、ち <u>っ</u> と(29オ)、か <u>え</u> つて(32オ)、お <u>っ</u> つけ(36オ)、 ～ <u>さ</u> つしやるの形(8ウ, 10オ, 12オ, 14オ, 18ウ, 28ウ, 31オ, 36オ, 39ウ, 40オ, 40ウ, 48ウ, 50ウ)
撥音	御さりま <u>せ</u> ん(13オ(例[48]))
拗音	あかれ <u>し</u> やれませい(3ウ(例[49])), たのま <u>し</u> やる(5ウ(例[50])), おもわ <u>し</u> やれう(8ウ(例[51])), やら <u>し</u> やれて(35オ, 39オ)、 ゆか <u>し</u> やれい(36オ)、おか <u>し</u> やれませい(37ウ)、 ～ <u>さ</u> つ <u>し</u> やるの形(8ウ, 10オ, 12オ, 14オ, 18ウ, 28ウ, 31オ, 36オ, 39ウ, 40オ, 41オ, 48ウ, 50ウ)

(下線は「ずらし音注」を示す。その他の巻の「促音、撥音、拗音」の例も  
巻一と同様の音注配置である)

[45]

が い へ  
つ へ

[46]

が い へ  
つ へ

[47]

が い へ  
つ へ

[48]

が い へ  
つ へ

[49]

が い へ  
つ へ

[50]

が い へ  
つ へ

[51]

が い へ  
つ へ